

4

環境コミュニケーション

4-1 環境に関する表彰

●キッズサミット参加宣言で、県立北星高等学校の取組が、優秀賞を受賞しました。

4-2 県民のみなさんとのコミュニケーション

●県民・事業者の方々に対して以下の事業を実施いたしました。

- ①地域ごみゼロ推進交流会の開催
- ②連携で進める「キッズISO14000プログラム」
- ③サステナブル経営セミナーの開催

4-1 環境に関する表彰

平成20年度開催の洞爺湖サミットで行われた取組「クラスで参加しよう！サミット参加宣言」（キッズサミット参加宣言）で、県立北星高等学校の取組が優秀賞を受賞しました。通信制で参加したのは同校のみで、環境問題を身近にとらえ、太陽光発電パネルの発電量、雨水貯蔵タンクの活用状況、緑のカーテン（ゴーヤ）の成長を記録し、CO₂削減量を調べました。通信制という限られた登校日数の条件のなかで、多くの生徒が一所懸命取り組んだ成果です。

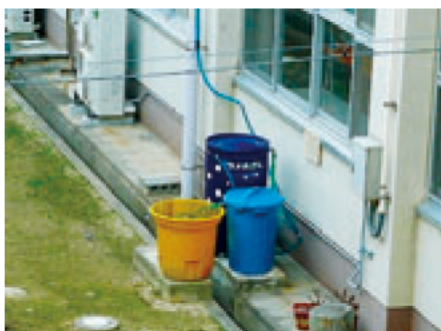


表彰状

具体的な活動内容としては、平成20年の夏に、ヒートアイランド現象〔都市化の影響により、都心部の気温が上昇する現象〕を緩和しようと、「環境」の授業を履修する生徒や教職員たちによって、雨水を利用した打ち水が行われました。

これは、雨水の有効活用のため、計400ℓ入りの雨水貯蔵タンク「ため夫さん」を設置しており、その水をバケツに入れ、ひしゃくを使って校庭や駐車場にまいたものです。

また、太陽光発電や、校舎横に植物を茂らせる「緑のカーテン」をつくるなどして、地球温暖化防止のための活動に取り組んでいます。



雨水貯蔵タンク



打ち水



緑のカーテン



太陽光発電



三重県全体の環境負荷を低減していくためには、県民のみなさんとのコミュニケーションも大切なんだ。

私たちも環境問題をもっと勉強して、自分たちができることを考えていきたいわ！



4-2 県民のみなさんとのコミュニケーション

①地域ごみゼロ推進交流会の開催

地域でのごみ減量化の取組の活性化を促進するため、地域の方々やNPO団体のみなさんを対象に、地域での取組発表や意見交換など参加者同士の情報交流、先進事例の研修、有識者による講演会などを県内8地域で開催しました。(環境森林部ごみゼロ推進室)

(三重県ごみゼロホームページURL <http://www.eco.pref.mie.jp/gomizero/>)

・ごみゼロ県民セミナー

～あなたの行動を大きなごみ減量につなげませんか～

県民のみなさんをはじめ、NPO・事業者・市町の方が、ごみ減量について考え、行動を始めるきっかけとして、平成20年7月19日(土)に三重県総合文化センター(津市)で開催しました。

消費者から集まったエコ提案を企業に届ける活動を行っているブログミーツカンパニー代表広田奈津子氏の講演の他、レジ袋有料化の取組について事例発表を行いました。



広田奈津子氏の講演

・ごみゼロ事業者・県民セミナー

～子どもたちと学ぶ未来のための環境学習～

平成20年12月7日(日)に三重県総合文化センターで開催したセミナーでは、地域に根ざした企業として環境学習に取り組んでいる事業者の方から講演いただくとともに、自らが主役となって環境活動を行っている県内の小学生と高校生の方々から取組を紹介していただきました。



あま市 鈴鹿市立大名小学校の取組発表

②連携で進める「キッズISO14000プログラム」

平成17年6月に策定した「三重県環境保全活動・環境教育基本方針」を踏まえ、地域での環境教育を具体的に展開していくため、三重県では平成18年度から、小学校児童が家庭での省エネ活動やごみの削減に取り組むことで環境への意識を高める環境教育プログラム「キッズISO14000プログラム」を、学校、企業、NPO、行政の連携により実施しています。

平成20年度は、県内企業11社から協力を得て、14市町23小学校で998名の児童がこのプログラムに取り組みました。

(環境森林部地球温暖化対策室)

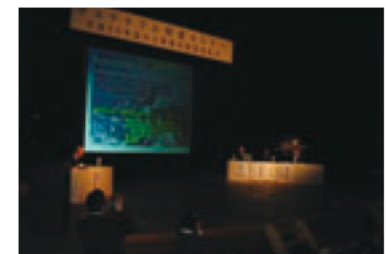


協力企業による子どもたちへの説明

③サステナブル経営セミナーの開催

持続可能な社会を構築するために、企業の先進的な環境取組や、企業、地域などあらゆる主体が連携した効果的な地球温暖化対策について、「低炭素社会に向けた企業の新たな取組」をテーマとした講演とパネルディスカッションを企業経営者及び企業関係者を対象に実施しました。

(環境森林部地球温暖化対策室)



パネルディスカッション

4-3 三重大学のみなさんとの意見交換

平成21年9月18日、三重大学において、三重大学及び三重県の双方の環境報告書に関する意見交換会を実施しました。

主な意見とそれに対するコメント

三重大学からの意見

全体的に活字や表が大きく、また、キャラクターにセリフをつけるなど、見やすさ・読みやすさを工夫していると感じます。ただし、図表の一部に色使いなど見にくい部分があります。

表紙に県内の写真を掲載していることは、三重県らしい報告書として親しみを感じるのよいと思います。

H20年度の使用紙量のグラフで、コピー用紙と外注印刷物の内訳がわかるとよいです。

公用車燃料の目標数値について、平成20年度目標が過去の実績より大きい値となっていますが、その背景がわからないので説明があるとよいです。

明確な数値目標を立てているのは、意欲的であり素晴らしいと思います。しかし、達成・未達成の背景、今後どのように改善するのかといった説明があるとよいです。

「紙を減らす10ヶ条」の具体的な内容が記載されているとよいです。

一部に馴染みのない用語があるので、もっと分かりやすい言葉を使用した方がよいです。

三重県からのコメント

できるだけ見やすく、読みやすくなるように、改善を加えます。

より親しみを感じていただける報告書となるよう、今後も工夫していきます。

グラフに、それぞれの数値を記載するようにします。

平成20年度目標設定の考え方について注釈を加えます。

未達成の原因と今後の取組について、記述を追加します。

取組のポイントとして記載することとします。

分かりやすい言葉に修正する、もしくは用語の説明を追加します。



意見交換会参加者

三重大学	総括環境責任者（人文学部）、学術情報部研究支援チーム（1名）、生物資源学部（1名）、施設部施設整備チーム（1名）、施設部施設管理チーム（1名）、環境ISO推進室事務局（1名）、環境ISO学生委員会（8名）、計14名
三重県	総務部副部長、総務部人材政策室（3名）、環境森林部地球温暖化対策室（1名）、環境森林部ごみゼロ推進室（1名）、計6名

4-4 第三者コメント

三重大学学長補佐（環境 ISO担当）

朴 恵 淑



三重県の環境報告書2009は、三重県が取り組んでいる環境政策に対する成果及び課題について分かりやすくまとめられています。

まず、ISO14001認証取得に伴う環境マネジメントシステム(EMS)の枠組み及び環境方針を掲載することで、三重県の目指す環境政策について理解しやすい構成となっています。

次に、EMSに基づく環境活動の報告が記述されていますが、単に前年度との比較をするだけにとどまらず、年度目標との比較も行うことで、PDCAサイクルの継続的改善がさらに見込める構成となっています。三重県独自の評価方式として高く評価できます。多様なキャラクターを起用することで、子どもから大人まで親しみながら読める構成にもなっています。評価を行うのは大変な作業であり、県民の誰もが理解しやすく表現することは、簡単そうで手腕が問われる難題ですが、キャラクターの表情を変えるなどの工夫により無理なく、全ページに目を通すことができます。大変よいアイデアであると思います。また、環境に有益な事業として、新エネルギー事業や生物多様性の保全、ごみゼロモデル事業、三重版EMSのM EMSの普及などについて詳細に記述されています。環境工夫においては、地域の住民や三重大学生などとの協働による海岸清掃活動などが記載され、職員への環境教育や環境監査の様子についても分かりやすく報告されています。

さらに、環境にやさしい三重県庁を目指して、全庁的な取組が掲載されています。特に、地球温暖化防止において温室効果ガスの排出量が前年度に比べて減少していることを表すのと同時に、平成22年度目標値を示すことで、さらなる削減目標の見える化に成功し、同時に県民の意識向上を促しています。環境関連施策に関する費用と効果において、環境指標及び環境保全活動指標を用いた評価を行うなど新しい試みが示されています。しかし、具体的な説明が明記されていないことから、表やグラフが何を表しているのか理解しにくい側面がありますが、創造的な取組であることから今後の発展に多いに期待します。社会的取組〔安全性の取組〕において、RDF貯蔵槽爆発事故以降の安全性の確保についての取組が詳細に記述されており、環境側面において負の部分においても説明責任を果たす三重県の姿勢が共感できます。防災・災害予防については、東南海地震が懸念されている地域であることから、防災・災害への対策についてもっと詳しい記述が必要であるように思えます。

最後に、環境コミュニケーションにおいて、環境活動への表彰、環境セミナーの開催、三重大学との意見交換など多様な内容が掲載されています。

三重県と三重大学とは、平成17年度から環境報告書に関する相互意見交換会を行うことで、より充実した環境報告書づくりに励んでいます。制作の立場から読み手の立場にかわる貴重な体験を通じて、各々の役割の重要性に気付き、実践できる意識向上にインセンティブ（動機づけ）となる大変貴重な機会となっていますので、これからも双方の持続的発展に期待します。